大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

フェミニスト現象学における「産み」をめぐって：男性学的「産み」論の可能性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-09-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 居永, 正宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004855

投稿論文

フェミニスト現象学における「産み」をめぐって
――男性学的「産み」論の可能性――

居永　正宏

はじめに

「産み」は、人間の基本的な営みであるにもかかわらず、これまで哲学的に論じられることがほとんどなく、哲学の歴史を通じてその背景をなしてきた人間（Man）中心主義の影に隠れてきた主題である。「産み」が「死」と並ぶ人間の条件であることを考えれば、現在に至るまで哲学が積み上げてきた膨大な死の考察に比べて、産みの哲学的考察の蓄積がほとんどないという状況は、（ほとんどが男性であった）哲学者の意識的・無意識的なジェンダー・バイアスがいかに強烈なものであったかを示している[1)]。そのような状況の下、筆者は、産みを哲学的に考察することが――死を考察するのと同じかそれ以上に――私たちの生のあり方をよく捉えるために必要であるという着想に基づき、先行文献の渉猟と考察を試みている。その中で貴重なものとして浮かび上がってきたのが、20世紀中葉以降、ボーヴォワールを嚆矢としてフェミニストが行ってきた産みについての議論の蓄積である。本論文では、その主流と言ってよいと思われる「フェミニスト現象学（Feminist Phenomenology）」を、「産み」を哲学的に考察した数少ない先行研究としてレビューしたい。その上で、フェミニスト現象学を踏まえて産みの哲学的考察をさらに深めていく一つの方向として、男性学的「産み」論の可能性を示したい。

---

1) この点に関してはRuddick（[1989] 1995）の第６章がまとまっている。また「男性（の哲学者）が産みを論じるとはどういう事か」については、居永（2014b）で考察した。

第１章　「産み」の哲学的な主題化

フェミニスト現象学に向かう前に、筆者が念頭に置いている産みの哲学的考察とはどういうものかについて、特にそれが何でないのかという点から、議論の前提として少し述べておきたい。

まず何より強調しておかなければならないのは、産みの哲学とは、産みの営みを人間の条件の一つ、そう言ってよければ人間の本質の一つとして捉えるものだが、それは、産みの主体である女性身体を本質化して、いわゆる生物学的決定論を復活させようとするものではない、ということである。他に人間の条件と言えば「死」が挙げられるが、死が性別に関係なく訪れるのに対して、産みは女性の身体と密接につながっており、その意味で産みを考察することは確かに女性的身体のあり方を考察することと切り離すことができない。それは後で見るフェミニスト現象学が主として女性的身体をめぐる探求となっている点にも現れている。しかし、ここで産みと女性的身体が分かちがたく結びついているということの意味は、決して「すべての女が産むべきだ」とか「産んでこそ女だ」といった点にあるのではなく、すべての人は女から産まれる、という点にある。別の言い方をすれば、女の本質が産むことにある、というのではなく、人は産まれたという点において本質的に女（の身体）と繋がっている、ということである。それは、アドリエンヌ・リッチの*Of Woman Born*という書名に込められた意味（女から産まれる）でもある。

次に、産みの哲学は、フェミニズムの一つの伝統をなしている中絶論争や、リプロダクティブ・ライツ／ヘルス論ではない。それは、死の哲学が、尊厳死・安楽死をめぐる論争そのものではないのと類比的である。もちろん、死とはなにか、人間にとって死は何を意味しているのかという哲学的考察が、尊厳死や安楽死をめぐる論争の（実際はともかく本来は）土台となるように、そもそも産みとは私たちにとってどういう営みなのかという哲学的考察は、実践的な場面での中絶の是非や生殖医療のあり方を考える上で土台となるべきものであるから、両者は結びついてはいる。しかし、例えば中絶について言えば、自己決定権に基づいて賛成するにせよ、産み

たい人が産めない社会的状況を問題化すべきだと主張するにせよ、それらの主張は、なぜ産むのか、そもそも産みとは何なのかという哲学的疑問に答えるものではない。もちろん、だからといって自己決定権や不平等な社会制度の批判に基づいた中絶論が有効であることに全く変わりはない。しかし、そうした主張においては、同じように自己決定権や不平等な社会制度の批判に基づいて行われる他の論争（FGM、シャドウ・ワーク、夫婦別姓等々）と中絶論とが一続きのものであるという点で、中絶論の背景にある産みという営みの固有性の把握を志向してはいない、ということである。ただしまた逆に、産みの哲学的考察の結果として示される産みの概念が、中絶論争を一義的に決着させるわけではない。それは例えば、ハイデガーが「死とは不可能性の可能性であり、それを先駆的に覚悟することでひとは本来的存在となる」と述べたとしても、そこから演繹的に安楽死や尊厳死の是非が導かれるわけではないようにである。産みの哲学は、あくまで産みという営みに関わる実践的な諸々の問題を考える土台となるに過ぎない。

最後に、産みの哲学は、抽象的な「誕生」や「はじまり」を問題とするのではなく、あくまでも人間の肉体に根ざした「産み」の次元を問題にする[2)]。前者として念頭に置いているのは、産みを主題化すると言いながら、生殖の次元から政治や芸術を生み出すという次元へと早々に議論が移っていくプラトンの『饗宴』や、肉体的生殖を「労働」の次元に置いてそれより上位にある政治的「はじまり」を重視するアーレントの『人間の条件』などである。産みには、産むもの－産まれるものという「二元性」、身体の生々しい関わりという「身体性」、生物学的で瞬間的ではなく人間的で時間の幅があるという「営み性」という三側面（居永2014a）があり、それは抽象的な「誕生」や「はじまり」といった概念では捉えられない「産み」固有のものである。

このような「産み」の特徴に最も近いところにある実践的かつ知的な営

[2)]「産み」「誕生」「はじまり」の他、「出産」「産出」「妊娠」など関連する単語は多いが、それらの区別については居永（2014a）参照。

みがフェミニズムであると思われるが、その点に関して、女性の身体性という視点から継続的に議論を試みている金井淑子が次のように述べている。

> 女性にとっての懐胎・出産の経験さらに母乳授乳という母の経験について、身体の差異に根ざすこれらの経験（の違い）について、果たしてフェミニズムは語ってきたのかというこの問いに対して、フェミニズムがとってきたのは、身体の経験の差異を問いとして立てること自体が「本質主義」であり意味のない問いだとする、「構築主義」の理論的立場を基本とするものだったといってよいだろう。（金井2008, 32）

> 第二波フェミニズム以降のフェミニズムの理論的実践的関心は「ジェンダー・ポリティクス」ではあっても、そこでは「ボディ・ポリティクス」は不在化されてきた。「女とは誰か」という女性の再定義に向けた理論的実践でもあったはずの女性学・フェミニズムにとって、一つの知的空白部分となっていたのが「身体」「性差」「セクシュアリティ」「フェミニティ」「フェミニン」などへの問いではないか。（ibid., 34）

この金井の認識は大枠としては妥当だと言ってよいだろう[3)]。そこから金井のように積極的に「差異派」的な方向へ向かおうとするのか、むしろ構築主義的な方向を極めようとするのかはそれぞれに任されているわけだが、いずれにしても女の身体から新しい人間が産まれるという事実――こ

[3)] ただし、「日本のフェミニズムには、平塚らいてうの第一波フェミニズムの時代から強い母性主義の傾向がある。むしろ「母性の拒否」に振れたことのある西欧の一部のフェミニズムに比べれば、日本のリブは「母性」を一度も手放したことがないといっていい」（上野2002, 187）という指摘もあるように、「母性」を基に女性身体を肯定する思想は80年代のエコフェミに到るまで連綿と存在するのも確かである。しかし、例えば日本のエコフェミを代表する青木やよひ（1994）のように、初めから「女性原理」のような理念を前提として立てるような議論と、以下で参照する、現象学的に女性経験に迫ろうとするフェミニスト現象学の間には、方法論的にも議論の有効性という点においても大きな違いがあるように思われる。

の「事実」についていかなる言い方をしても構築主義的批判を免れることはできないが――に関してのある種の知的把握が不足していることは間違いない。筆者が試みようとする産みの哲学はそこに関わるものであり、いわば「死の習い」ではなく、「産みの習い」であるような哲学を模索する試みである。その一つの手掛かりとなると思われるのが、フェミニズム内部から、女性的身体、そして産みを把握しようとする「フェミニスト現象学」である。日本では比較的マイナーな分野であり、邦訳もほとんどないので、まずその概要を確認しておきたい。

第2章　フェミニスト現象学

フェミニスト現象学とは、その名の通りフェミニズムと現象学の一種の学際的研究である。フッサール以来の現象学が、普遍的で中性的な超越論的意識の解明を目指すと言いながらも、そこで実際に問題とされてきたのは特権的な男性的意識ではなかったかという批判から、現象学的な方法論の有効性を認めながらも、その対象範囲をより多様な意識や経験へと広げていく、というのがその基本線である。古典的なテキストとして挙げられるのは、例えばボーヴォワール『第二の性』における女性的体験の記述である。ただ、ボーヴォワール自身は特に現象学的方法論を前面に出しているわけではなく、それ以降も、フェミニスト現象学という名の下にまとまった統一的な言説があるというよりは、現象学を代表するフッサール、ハイデガー、メルロ=ポンティ等のテキストについてフェミニズムの立場を踏まえた批判的読解を行っている文献の周りに、女性的経験の現象学的記述を行っている文献が大きく広がっている、という印象である。

フェミニスト現象学に関する日本語文献は、現象学関連のアンソロジーに所収された論文が一本（有坂2004）と、ワークショップの記録（齋藤瞳他2012）と講演録（シェル2014；稲原2014）があるのみで、それらは海外のフェミニスト現象学の言説の紹介を主としたものである。以下本論文では主に英語圏の文献を見ていきたい[4)]。

先に『第二の性』を挙げたが、フェミニズムと現象学の学際的研究と

いう位置付けを自覚的に行った最初期の文献としては、Bartky（[1975] 1990）とYoung（[1984] 2005）が挙げられる[5]。前者は、中性的な労働者の疎外された意識を中心に置くマルクス主義的な階級意識論に対して女性固有の抑圧された意識の記述が必要だという主旨で書かれており、例えば「フェミニスト意識とは迫害された意識なのだ」（Bartky［1975］1990, 15）という言い方にも現れているように、妊娠・出産といった意味での女性身体固有の経験を捉えるというよりは、労働者の解放とは必ずしも一致しない女性の解放へ向けてフェミニズムが左翼運動から差異化していく過程を反映した論文である[6]。一方後者は、メルロ=ポンティの「生きられる身体」論を踏まえて自身の妊娠・出産における身体経験を記述しており、本論文の産みという主題にそのまま重なる論文である。その詳細は次章で見たい。

上記両論文の後、構造主義や構築主義の流行もあって、現象学的な研究はあまり盛り上がりを見せなかったようだが、1994年にフェミニスト現象学をテーマとしてフロリダで催されたシンポジウムの論集がFisher & Embree Eds.（2000）として出版されている。2010年代になると、フェミニスト現象学を冠した論集がSchües et al. Eds.（2011）、Zeiler & Käll Eds.（2014）と出ており、また産みに関するフェミニズム的な哲学的考察を集めた論集であるLintott & Sander-Staudt Eds.（2012）やAdams & Lundquist Eds.（2013）の中に現象学的な方法論を取っているものが見られるなど、一定の継続的な言説がある。

それらの中で、ここではフェミニズムと現象学の関係をまとめている

---

[4] 英語圏の外に目を向ければ、産みをテーマとするフェミニストといえばやはりクリステヴァとイリガライを参照すべきだが、その精神分析的な背景の理解も含めて、残念ながら本論文では立ち入る余裕がない。

[5] 同時期のRich（[1976] 1995）は、その副題が「制度としての母性と経験としての母性」であり、前者を解体し後者を追求するという立場で著されていることからも、本論文の問題意識と大きく重なるものである。ただ、日本で言えば田中美津に感じられるような、鋭い現状把握の上での独特の直観に基づいたメッセージ性の強い記述は、それとして独自の読解を必要とするように思われるので、本論文では措いておきたい。

[6] 本論文との関連で言えば、Bartkyは「（母であること［motherhood］のように）私自身が持ったことのない経験の蓄えが必要な主題に関しては、取り扱わなかった」（Bartky 1990, 9）と述べている。以下、外国語文献からの引用文中の原語は［ ］で示す。

Fisher, L（2000a; 2000b）を見ておきたい。まずFisher, L（2000b）では、フェミニズムと現象学の関係が、次の三つの側面に分けられている。

1．旧来の現象学文献のフェミニズム的検討、特にそこに潜む男性バイアスについて
2．現象学的方法論による女性的経験の記述
3．現象学そのもののジェンダー化

Fisher自身はあまり具体例を添えていないので、筆者のレビューした範囲で適当な文献を引いて説明したい。

第一の側面としては、例えばButler（1989）が、メルロ=ポンティの『知覚の現象学』のセクシュアリティ論について、中性的に描かれているようで実際には「見る主体＝欲望する主体＝主人＝男性身体」と「見られる主体＝欲望される主体＝奴隷＝女性身体」という対比を背景に成り立っていることを明らかにしたような批判的読解がある。また逆にBigwood（1991）のように、同書の「生きられる身体」の典型例を「母になる身体［mothering body］」（ibid., 68）と解釈することでメルロ=ポンティの議論をさらに発展させようとする方向もあり、テキスト批判と発展的読解の両側面で男性バイアスを取り除いていく作業が行われているようである。

本論文の主題である産みと最も密接に関係するのが第二の側面である。その例としては、先に挙げたボーヴォワールの『第二の性』、またBartky（1990）とYoung（2005）に収められた諸々の女性的経験の現象学的記述が挙げられる。特にこの側面の作業においては、女性的経験の現象学的記述が、固定的で抑圧的な「女性的経験」を構築してしまうことに常に配慮しながら考察を進める必要がある。

第三の側面は少し分かりにくいが、Fisher, L（2000b）の言葉をそのまま引けば、“not just a phenomenological analysis *of* gender, … but phenomenological analysis that *are* gendered”（ibid., 37）ということである。例えばOksala（2003；2004）が、後期フッサールの“Generativität”概念から導かれる発生的現象学というアイデアについて、それを母からの誕生として解釈し、現象学の主体にそれが母から産まれたという契機を内在化させることができるのではないかという方向を示している。これなど

は、現象学の核心である超越論的意識そのものをジェンダー化するという意味で、ジェンダーの現象学的分析ではなくジェンダー化された現象学的分析というFisherのアイデアを具現しているように思われる。

これら三つの側面の中で、第三の側面は、産みを主題とする本論文が現象学的方向の探求を突き進めていけば重なっていく方向であると思われるが、次章では主に第一、第二の側面を、特に産みの経験について見ていく。

次に、Fisher, L（2000a）が、そもそも学際的性格を持つフェミニズムと現象学の交渉がなぜこれまで比較的乏しいものに留まっていたのかについて論じているので、それについて若干の私見を述べたい。Fisherの主張はシンプルなもので、要するに、その理由は現象学の理論内在的なものではなく、男性現象学者の社会文化的に構築された意識がジェンダー領域に関心を向けなかったからだ、というものである。

> 現象学は多くの側面において革新的で独創的、さらには急進的ですらあるという高い評判にもかかわらず、過去現在の多くの現象学者は、この問題（フェミニズム）の重要性を未だに全くと言っていいほど理解していない時代と状況の、全くの産物なのである。（ibid., 7、強調引用者）

この主張自体に反論すべき点はない。そのような男性現象学者の意識が、哲学的な主題選択においても、教育と研究における実践においても、フェミニズム／フェミニストが現象学に接近することを阻んでいたことは間違いないだろう。しかし、それは現象学に限ったことではない。男性マルクス研究者や男性精神分析家も、同じ時代状況の産物であり、同じようにフェミニスト／フェミニズムを排除してきたはずである。だとすれば、なぜマルクス主義フェミニズムや精神分析フェミニズムが活発であったのに比較して、フェミニスト現象学はそうではなかったのか。Fisherの説明はこの疑問に答えるものではない。Fisherは現象学の理論内在的にはフェミニズムを排除する要因は見当たらないというが、その理論の性格に原因があるのではないか、というのが筆者の見解である。

それもシンプルなものだ。およそ理論の性格を「解放に向かうもの」と「認識に向かうもの」の二つに分けて考えてみると、フェミニズム、マルクス主義、精神分析、またリベラリズムなどは前者に、現象学、カント超越論哲学、分析哲学などは後者に入るだろう。そこで明らかなように、同じ解放の側にある、フェミニズムとマルクス主義、精神分析、リベラリズムは親和的であるのに対し、フェミニズムがあえて「純粋な認識」を志す現象学に接近する必然性は低い。したがって、マルクス主義フェミニズムや、精神分析フェミニズム、そしてリベラルフェミニズムが活発な学際領域をなしているのに対し、フェミニスト現象学は女性身体に認識論的関心を持つ個人による散発的な探求となってきた、と考えられる。もちろん、特に構築主義がそうであるように、解放と認識は切り離されているわけではない。例えばメルロ=ポンティの現象学的身体論やレヴィナスの他者の現象学など、基本的には認識を目指す現象学にも解放の理論としての側面がやや強いものもある。そういう側面が強ければ強いほど、両者の接近が必然性を有してくることになり、実際、フェミニスト現象学でも、フッサールやハイデガーよりはメルロ＝ポンティやレヴィナスが引かれることが多いように思われる。ただそういう傾向はあるにせよ、一般的に言えば、フェミニスト現象学には認識論的側面が強いことは間違いない。ここで少し先走って言えば、逆に（男性）現象学者にとっては、フェミニスト現象学――特に産みのそれ――は認識というよりも解放の理論となるのではないか、と筆者は考えている。この点には本論文の最後で戻ってくるとして、次にフェミニスト現象学において産みがどう論じられてきたのかを見ていこう。

第３章　フェミニスト現象学における「産み」

前章のはじめに述べたように、フェミニスト現象学の古典的なテキストとしてよく挙げられるのが、ボーヴォワール『第二の性』で描かれる子供時代から老年期までにわたる女性の経験である。その中には妊娠出産の記述も含まれているので、最初にそれを見ておきたい。

全体としては自由な選択と参加に価値を見出すサルトル的実存主義の枠組みで論じられている『第二の性』において、身体は基本的に足枷であり、妊娠出産はその一例として捉えられる。「妊娠した女に特異なことは、彼女の肉体が自らを超越しようとするその時に内在として捕らえられることである。…なぜなら、彼女は人間でありながら、つまり意識、自由でありながら、生命の受動的な道具となっているからだ」(Beauvoir［1949］1976, II 345［Ⅱ（下）37］[7])。このような記述を基に、ボーヴォワールは妊娠出産を単なる生物学的作用に還元しているという批判がなされることもある[8]。

しかし他方で、ボーヴォワールは次のようにも述べる。「全体的には、この重大な場面（分娩）で女たちは一般的には世界に対する、個別的には自分の母性に対する根本的態度を示していると言える」(ibid., 357［55］)、「子どもを産むこと、それは参加を選ぶことである」(ibid., 381［93］)、「女は自分の人生に意味をもたらす場合にしか子どもを産むことに同意できない。経済・政治・社会生活のなかで一つの役割を果たそうとせずに母親であることはできないだろう」(ibid., 383［97］)。これらの記述は、一旦は受動的に受け入れるしかない生物学的運命として現れた妊娠出産を、改めて能動的に捉え返して自分自身のものとする可能性を示している。先の批判とは逆に、このような記述を基にボーヴォワールは身体に対する実存的選択の優越性を強調し過ぎているという批判が向けられることもある[9]。

だがボーヴォワールの記述を追っていけば、この一見相反する能動と受動とは、どちらか一方に最終的に決着するというものではなく、詰まる所、その中で行動するほかない両義的状況の二側面ということになる。「母親は一つの主体に従属する客体ではない、また、自由であるがゆえに不安な主体でもない。母親は生命というこの渾然とした現実なのだ」(ibid., 346［38］)、「(自分が産むのであると同時に自然に授かるものであるように、)

---

[7] 以下、外国語文献の邦訳頁は原著頁の直後に［　］で示す。
[8] 例えばO'Brien（1978, 235）。
[9] 例えばStone（2007, 177）。ちなみにこのStone（2007）の第6章はフェミニスト哲学における「誕生（birth）」のまとめとなっており、参考になる。

妊娠の意味はこのように両義的であるから、女の態度が矛盾しているのも当然である」(ibid., 348[41])。フェミニスト現象学の産みをめぐる探求は、ボーヴォワールが素描したこの能動と受動の両義性をいかに捉えるかについての様々な変奏だといってもよい。

まず、前章で引いたFisher, L（2000b）がフェミニスト現象学の第一の側面として挙げていた旧来の現象学文献のフェミニスト的批判の中で、産みという視点からの批判を行っている研究がある。そこで挙げたBigwood（1991）の他にも、メルロ＝ポンティを取り上げて、『知覚の現象学』の「生きられる身体」や、遺作『見えるものと見えないもの』の「キアスム」概念を母なる身体として解釈する文献がいくつか見られる（Fischer, S 2012; Guenther 2013; Welsh 2013)。しかしそれらの文献を読んでみると、全体としてはメルロ＝ポンティの主張を再解釈しているという域を出ず、母なる身体や妊娠する身体というところから何か独自の認識の地平を開くには至っていないように思われる。

次に、ハイデガーが『存在と時間』で示した「死へ向かう存在」という実存把握について、それが生のもう一方の極である誕生を正しく捉えていないという視点から、それを「誕生からの存在［being-from-birth]」（Schües 1997）や、「他者からの存在［being-from-others]」（Guenther 2008）として再把握しようとする試みがある。特に後者は、死へ向かう存在である現存在は誕生を含む全ての与えられた過去を改めて自分で選び直して自分のものとした上で未来の可能性を拓く、というハイデガーに対し、誕生はそのように他の過去と並んで選び直せる契機ではない、という点を強調し、次のような鋭い批判を行う。

> 私が主張するのは、誕生が開く可能性を何か自分が自分に与えるようなものとして主張しないということが倫理的に絶対必要である、ということです。それが回顧的にであっても、比喩だとしてもです。なぜなら、誕生という贈り物は、単に諸々の可能性を私に与えるだけではないからです。それは私自身を与える、私自身を存在せしめるのです。この可能性の開闢を私自身の選択であったかのように再演するこ

とは…とてつもなく倫理に反した他者の消去です…（その他者とは）私の母です。（ibid., 107、強調原文）

この批判は、「死へ向かう存在」という実存把握に対する批判として、強烈なインパクトを持っている。ハイデガーの別の鍵概念に「被投性」があり、これはどこかに私を世界に投げ入れる主体がいるのではなく、気がついた時には私は既に世界に投げ入れられていた、という事態を表すものだ。しかし上の批判からすれば、それも自らの根源に他の肉体との生々しい繋がりがあるという点を見ようとしない、倫理に反した実存の独り善がりだということになる。このようにして、「死へ向かう存在」を中心として組み立てられた実存哲学は、他者から産まれたという視点から再構築を迫られることになる。これは実存哲学の時間性のコペルニクス的転回と言ってもよい。

だが一方で、産みの現象学的把握としては、この「他者からの存在」という視点だけでは不十分であると言わざるをえない。この「他者からの存在」というのは、その他者によって産まれた存在からの視点、要するに子供の視点からの把握である。しかしそれでは産みの主体が他者化され、例えば「大文字の母（Mother）」というような言い方で理念的に把握されてしまい、受肉した存在性を剥奪されてしまいかねない。それではボーヴォワールが「女は常に他者として疎外されてきた」と批判した事態を反復することになる。私を産むものは、私の実存の根源にある抽象的概念のようなものではなく、受肉した主体として把握されなければならない。そのためには、産みの哲学的探求は、「産まれたこと」ではなく「自分が産む」ということを第一の主題としなければならない（居永2012；2014a）。その点から言えば、このフェミニスト現象学によるハイデガー批判は、もう一歩進んで「産みへの存在（being-toward-birth）」という実存把握を目指すべきであるように思われる。

この、生まれた子供の視点ではなく産む母親の視点からの探求が重要であるという点を意識して考察を行っているのが、精神分析批判を背景に母子関係を現象学的に論じているBaraitser（2009）である。彼女によれ

ば、フロイト以降ラカンに到るまで、「母」は精神分析の中で常に鍵概念であり続けてはきたものの、基本的にそれは子供の視点から子供の発達の関数として把握されてきた。もしくは母親の視点から子供との関係が記述される場合でも、子供は母親のナルシシズムの対象であるとか、母親が自分に欠けている男根（ファロス）の代償を子供に求めているというように、母親が子供を産むということの全体を捉えているとは到底考えられないような理論的狭隘さの中に留まるものであった。そこで彼女は、妊娠から幼児保育に至るまでの過程をあくまで母親の主観性を軸にして記述しようとする。その詳細をここで追うことはできないが、例えばその一つの成果として――アラン・バディウの倫理学を参照して――彼女が導き出したのが、「（母親の）愛とは、二人［the Two］の視点から世界を尋ねること［an inquiry］である」（ibid., 119）という命題である。これは、たった一人の孤独な実存としてでもなく、客観的で普遍的なルールでもなく、さらには向かい合った二人の閉鎖的な関係でもなく、世界を私と子供の二人（the Two）で訪問するという特有の倫理的あり方を示す。もちろんこれは、何らかの母性愛を本質化するものではなく、産みによって成り立つ関係とはどういうものかという考察の結果として導かれた一つの可能性である。

さて、このBaraitser（2009）は、前章でFisher, L（2000b）が分類したフェミニスト現象学の第二の側面である、女性的経験の現象学的記述に分類できる。この第二の側面の代表としてフェミニスト現象学の多くの文献で参照されるのが、特に妊娠状態を現象学的に記述したYoung（［1984］2005）である。

Youngの論文の副題は「主観性と疎外」となっているが、この「疎外」とは、ボーヴォワールが言っていたような生物学的身体による自由な実存の疎外という理念的な意味ではなく、医療専門家の権威主義による妊婦の疎外――そもそもそのような社会関係における疎外が理念的な疎外を生み出す――という意味である。それを受けて本論文の後半は当時のアメリカ社会を背景とした医療制度の批判となっており、前半の妊婦の主観性の現象学的記述とは理論的に独立した形になっている。ここでは前半の議論に限って見ていくことにしたい。Youngが妊娠の現象学的特徴として挙げる

のは次の三つである。

1．経験の統合性のゆらぎ

2．身体の質料性の現れ

3．動き、成長、変化の時間性

一つ目の経験の統合性のゆらぎとは、簡単にいえば、自らのあらゆる身体経験を自らが覆い尽くしているという感覚がなくなってくる、ということである。一般的に、現象学は経験そのものを目指すものだが、その際その経験が自らの経験であることは自明の前提である。むしろ、「経験」と「自らの経験」とは同義語だと言ってもよい。しかし、身体において他者と共同状態にある妊娠期間には、自らの身体経験と他者（胎児）の経験の境界が曖昧になってくるとYoungは言う。例えば胎動について、「それは私の感覚、私の内部であり、気泡のような何かとして感じられる。しかしそうではないのだ。それは差異であり、他の場所にあり、他のものに属しているのだ。だがそれにも関わらずその他のものとは私の身体なのだ」（Ibid., 49）というように。これに対して、例えば目の前の人と体が触れるのと胎動とを同種のものとして、胎動も私の経験に回収できると解釈することも可能ではある。しかしそのような解釈は、そのようにすべてを自己の経験に回収する行き方が前提としている自己／他者の区別こそが妊娠という身体経験において揺らぐのだというYoungの主張に反論せず、そのような批判が無かったかのように自己／他者の区別を温存しているに過ぎない。一言で言えば、この経験の統合性のゆらぎは、身体経験と「自己／他者」区分との関係についてのさらなる考察を求めている。

第二の身体の質料性の現れとは、妊娠する身体の急激な変化によって身体が「行動の透明な媒体［medium］」ではなくそれ自体質料性を持ったものとして立ち現れる、という事態のことである。現象学において、一般的に身体は行動が成功裏に果たされているときには透明な媒体として認識から捨象されており、それが前面に出てくるのは、行動の失敗、疲労、病気等によって身体と世界の関係が不能に陥ったときに限られる。しかしYoungは、「私の投企［project］の純粋な媒体としての身体の観念は、精神として人間性を考える西洋哲学の遺産を投げ捨て切れていない哲学の幻

想である」（ibid., 52）とした上で、妊娠状態においては、歩行や前屈などの日常動作においてそれが成功裏に営まれながらも身体がそれとして顕在化すると言う。この第二点に関しては、Youngの意図するところは理解できるものの、それは必ずしも妊娠した身体に限らないようにも思われる。例えば足に障害があって「上手く」歩けないとしても、その足によって可能な歩行をある程度快適かつ成功裏に行っているとか、もしくは健常な成人が短距離走をしたときに、その走り自体は成功裏に果たされていても走者自身には身体の質料性が身に染みて感じられる場合など、行動が妨げられずとも身体の質料性が現れるということは妊娠に限らずあるように思われる。つまり、第二点に関しては、そこで与えられるYoungの現象学的記述の妥当性は否定されないものの、それは妊娠した身体の固有性を捉えたものではないように思われる。

最後の第三点目は、妊婦の時間性についてである。Youngによれば、伝統的に妊娠期間は子供の誕生という瞬間を待つこと（waiting）として描かれてきた。しかしそれは妊婦の主観性を無視した記述であり、「妊娠した主体にとっては、妊娠は動き［movement］、成長［growth］、変化［change］の時間性を有している」（ibid., 54）のである。この点に関してYoungはあまり詳しい説明を与えていないのだが、要するに、妊娠期間とは、固定した自己同一性に留まるのではなく、また逆に何らかの変更が計画的に行われるのでもなく、みずからの身体から産まれてくる他者との共存と対面を通した予期せぬ変化が継続的に続いていく期間である、ということだろう。このような時間性の把握は、最初の経験の統合性のゆらぎと密接な関係にある。もし妊娠が自らの経験の統合性を堅持したままでも可能なのであれば、妊婦の時間性が成長や変化である必然性もないからである。

ここで、以上のようなYoungによる妊娠の現象学的記述に対して一つの素朴な疑問が浮かぶ。即ち、そもそも全ての妊娠した人が上の三点に当てはまる同じ経験を持つのか、ということである。もちろんその点はYoungも自覚しており、論文のはじめに「この論文の分析は、技術的に高度化した西洋社会にいる女性に固有の経験に限定されている。この分析は、妊娠

がそれ自体を目的として経験され、気付かれ、じっくり楽しまれうるということを前提としており、それは、妊娠するのだという明確な決断、もしくは少なくともそれを積極的に受け入れて一体感を持つ形で、妊娠が女性によって選択されることを含意している」（ibid., 47）という断り書きをしている。これに対して、Youngが分析の外に置いた経験として、Park（2006）が養子の母の経験、Lundquist（2008）が非選択的妊娠（レイプ、精神的な妊娠否定症［denial of pregnancy］）について論じている。両者の議論の妥当性の検討はここでは措くが、このような多様な妊娠出産さらには親子関係の現象学的な記述がなされていくべきであることは間違いない。

さて、ここまでフェミニスト現象学における産みの議論を追ってきた。到底網羅的とは言えないが、おおよそのところは示せたのではないかと思う。そして、ここに至って筆者には、フェミニスト現象学の産みの議論全体について、一つの特徴が見出せるように思われるのである。それは、ほとんどの議論が妊娠を産みのスタート地点もしくは議論の中心においている、ということである（他方でその議論が分娩で終わるか子育てまで含むかは様々である）。確かに、妊娠出産子育てというように、常識的には妊娠を産みのプロセスの出発地点としても違和感はないかもしれない。また、これまで現象学で顧みられてこなかった妊娠出産という経験に焦点化することが現象学を問い直す視座となるのも確かである。しかし、専ら妊娠から出発するフェミニスト現象学の議論は、それがあたかも前史を持たず、無から生じたかのような錯覚を起こさせる。それは先のハイデガー批判で指摘された、誕生を無からの誕生として捉えて母を消去することと類比的である。もちろん女性が妊娠しなければ産みはない。だがそれ以前に卵子と精子が結合しなければ妊娠はないのであり、その意味で産みは少なくとも何らかの形での女性身体と男性身体の交渉によって成り立つ。産みを主題とする限り、そのプロセスを省くことはできないはずである。その意味で、産みの現象学は、女性身体と男性身体の交渉の現象学、即ち性的関係の現象学を含むべきではないのだろうか。先に断っておくが、これはセクシュアリティの多様性を否定する強制的異性愛のようなイデオロギーの言説ではまったくない。また男性の産みへの関与は受精で終わり、その

後は全て女性に任せておけばよいという主張でもまったくない。さらに、卵子／精子を生産できない女／男を女／男以下として排除する言説でもまったくない。そうではなく、男を産みの現象学に巻き込み、性関係から子育てに至るまで、女にとってだけではなく、男にとって産みとは何なのかを考察すべきである、ということだ。

本章の最初に見たボーヴォワールの『第二の性』には、出産の記述の前に恋愛関係についても述べられている。それは例えば次のようなものである。

> 男女のたたかいがあるかぎりは、男と女の性愛の非対称性は解決できないさまざまな問題を生み出す。こうした問題は女が男に欲望と尊敬を同時に感じるときにたやすく解決できる。男が女の自由を認めつつ肉体として女を欲しがるなら、女は客体になる瞬間に自分を本質的なものと再発見し、自らが同意した服従のなかでどこまでも自由である。（op. cit., Ⅱ 187［Ⅱ（上）265-6］）

> 実のところ、性愛を絶対的な目標や単なる手段として扱うことはできないだろう。性愛が実存を正当化することはありえないだろう。しかし、性愛がべつのものによって正当化されることもありえないのである。つまり性愛は、人間の一生を通じて、副次的だが自律的な役を演じるべきであろう。何よりもまず、それは自由であるべきなのだ。（ibid., 256［364-365］）

ボーヴォワールが示した産みの両義性をフェミニスト現象学が様々に変奏していったように、上記の引用も性関係の現象学的、哲学的考察の一つの手掛かりとなるものだ。そこから男女の性関係を男と子供との関係まで含めた広がりの中で考察し、男にとっての産みとは何かを提示することが、男性（の哲学者）が担うべき大きな課題であるように思われる。それは、女性の身体の視点から、妊娠を出発点として考察されてきたフェミニスト現象学による産みの議論を新しい段階に引き上げるとともに、「私たちは、

最も深い意味で彼らが母親の息子でいることを願うが、一方では、彼ら自身で成長することを、私たちが女であることの新しい道を見つけようとしているように、彼らも男であることの新しい道を見つけることを願っている」（Rich［1976］1995, 211［294-295］、強調引用者）という呼び掛けに応える試みともなるだろう。

第４章　男性学的「産み」論の可能性

その男性学的「産み」論の可能性を模索するにあたって、まず「そもそも男性は産めないではないか、妊娠・出産できない男性にとって産みは無関係なのではないのか」という基本的な疑問に答えておきたい。確かに、生物学的に雄の身体であるところの「男性」は、生理的プロセスとしての産みの過程を直接自分のものとして経験することはできない。その意味においては、男性にとっての産みを考えるというのはナンセンスであるように思われる。しかし、筆者が産みの哲学として考察の対象としたい「産み」とは、陣痛と分娩に局限された生理的現象ではなく、その前後に広がるパートナー同士の生殖関係とそれによってこの世界に生まれる子供という他者との関係を含んだ人間的営み全体である。このような産み把握から言えば、単にパートナーと共に産みに関わった男性に留まらず、そもそも「自分の子供」を持つという経験を持たなかった男性（および女性）についても、社会に張り巡らされた産みの営みのネットワークの中に否応なく組み込まれているという意味で、産みと繋がっている。そして男性学的な「産み」論とは、この産みの営みの中で男性であるとはどういうことなのか、その営みに男性はどう関わるのかを、産みの営みと男性であるということを共により豊かにするような方向を目指して探求するものである。

したがって、それは単なる「立会い出産」の奨励のようなものではない。それまで産みに主体的関心のなかった男性が、非日常的な分娩の瞬間に立ち会うことで一種の感動を味わうことがあるかもしれないが、それは男性学的な産みの考察においてはむしろ周縁的なものである。例えば、「その時に、実はパートナー…から分娩室に一緒に立ち会ってくれと言われ

まして、立ち会ったのですけれど、人生観が変わりました」（村瀬＆村瀬 1994, 2）、「それに立ち会ったことによって、僕は男の大脳皮質に何かを開発されたような感じを受けたのです。それはどういうことだったかというと、たぶん「生」と「性」の両方について、あらためて別の視点ができた。生まれる子どもの姿も大変感動的であったし、セクシュアリティそのものの現場に立ち会わされて、僕に大きな影響を与えたのです」（ibid., 3）、というような表現は、立会い出産の経験談にまま見られる。しかし、この著者が出産後の家庭生活の中でパートナーに家事分担の不平等を突きつけられて動揺したと同時に告白しているように、男は出産に立ち会うことによって何らかの認識の転換を果たす（と自分で思う）ことはあるが、それが日常生活上の実践的な関係性の変化に自動的に結びつくわけではない。出産という瞬間だけではなく、産前の性関係と産後の育児へと時間の広がりのある産みの認識を、男性学的「産み」論は目指す。それは、「産みと男性は無関係ではないか」という立場から見れば、一種の男性解体でもあるだろう。

また男性学的「産み」論は、「男の子育て参加」を重要な部分として含むが、単なるその奨励のようなものでもない。例えばRuddick（[1989] 1995）は、「産むこと（birth giving）」と「母親をすること（mothering、要するにケア役割を担うこと）」を分け、重要なのは後者であり、それは性別に関係なく担われるべきだと主張する。筆者もそれには全く同意し、ケアの中にも男女にそれぞれ得意な分野があるというようなジェンダー秩序の再生産を主張するつもりも全くない。ただ指摘したいのは、産みとケアを分けて後者に焦点を当てることは、親子関係の多様性を認めるという点で重要ではあるのは論を俟たないが、それは逆にそこで育てられる子供もやはりどこかの女性から産まれた、さらにはその前に何らかの男女の交渉があったという点を日陰に追いやってしまわないだろうか、ということである（断っておくが、ここに異性愛血縁家族を模範的家族だと位置づける意図はない）。

実際、Ruddick（[1989] 1995）に再版にあたって収められた序文の中で、彼女はこう振り返っている。「*Maternal Thinking*（この本）を書いて以来、

私は産むこと［birthgiving］と父親［fathers］についてもっと緻密かつ丁寧に考えようと努めている」（ibid., xiii）。その一つの成果だと思われる論文（Ruddick 1997）に、男と産みの関係の探求の必要性を述べた箇所があるので、少々長いが引用しておきたい。

> 女だけが産みます。しかし男性の身体も女性の身体もともに本来的に産み出すもの［inherently procreative］なのです。私は、もっと豊かで、想像力に富んだ仕方で練り上げられた、産み出すものとしての男性の身体理解を喜んで受け入れるでしょう。…もし男たちが、彼らの身体が産み出すものであることを早くから十分に理解すれば、彼らはもっと容易く、贈り物としての子ども［children as given］と彼らとの関係を認識できるでしょう。…／もっと一般的には、誕生［birth］の象徴的および道徳的意味のより豊かな理解が必要であり、それは身体的な生と死を顧慮するにあたって中心的なことである、と私は信じています。人間が産まれてきたものであるということ［human natality］への顧慮は、女性と同様に男性の産みの経験と欲望を含むものでなければなりません。ただ男たちだけが、私が聞いてみたいと思うような、男性の性的な産みの能力［male sexual procreativity］の豊かな物語を創り出し、物語ることができるのです。（ibid., 215-216、強調引用者）

このRuddickの主張は、ケア役割は男女平等であるべきだという――それ自体は妥当で今後も継続して主張されるべき――議論を超えて、男と産みの関係を身体性において問い直すという新たな問題空間を拓くものである。

しかし残念ながら、現状では男がそのような「豊かな物語」を語るための言葉は極めて貧困であると言わざるを得ない。もちろん、男性の性に関する研究は、当事者研究を含めて数多くあるだろう。だが荻野（2002）の指摘が今でも当てはまるように[10]、それらの男性学が語ってきたのは、主にセクシュアリティと性暴力についてであり、男にとってのパートナーと

の性関係から子育てまでを含んだ考察はほとんどない。

この点、男性学的な性の当事者研究として独自の探求を深めている森岡（2005）も、産みという視点を欠いている点では同じである（居永2012）。その森岡がある対談の中で、「たぶん多くのフェミニストに一番見えていないのは、男性の自己嫌悪という問題ではないでしょうか。…女性は男性の権力性についてすごく鋭利な洞察をしたけれども、洞察しきれなかった部分もいくつかある。そのうちの大きなものの一つは、男性の自己嫌悪、特に身体蔑視の問題だと思います」（森岡&杉田2010, 181-182）と鋭く指摘している。森岡（2005）も、この男性の自己嫌悪を主題としたものであったが、それを乗り越える方途としては「やさしさ」というような抽象的な回答を示すに留まっている[11]。この点に関して、上野（2010）が次のようにコメントしている。

> 男性の自己嫌悪とは他者化した身体からのリベンジだ。そんな男性が、ミソジニーを超える方法はたったひとつしかない。それは身体を他者化することを止めることだ。言いかえれば、身体および身体性の支配者としての精神＝主体であることを止めることだ。そして身体性につながる性、妊娠、出産、子育てを「女の領域」と見なすのを、止めることだ。（ibid., 270、強調引用者）

この上野の指摘は、森岡が指摘する男性の自己嫌悪を乗り越える、より具体的な道を示すものであり、先に引いたRuddickの主張――「産み出すものとしての男性の身体理解」――とも重なる。これらの論者による言及

---

[10]「…従来の男の身体をめぐる言説には、いくつかの特徴もしくは偏りが見られる。第一は、セックス、セクシュアリティに関心が偏り、男と生殖（避妊、中絶を含む）の関係についてはほとんど語られてこなかったことである。…／第二は、女性（特にフェミニスト）が男のセクシュアリティを問題にする場合、「従軍慰安婦」問題や強姦、セクシュアル・ハラスメント、夫婦間暴力などの性暴力がらみか、もしくはポルノグラフィや売買春のように性の商品化がらみの文脈が議論の中心となってきたことである」（ibid., 222-223）。

[11] 例えば、「不感症をやさしさの源泉とすること、ここに「感じない男」からの脱出口が開いている」（ibid., 168）。

を受けて、本論文の一つの結論としてここで言えるのは、まず男の身体性を問い直すこと、特にその性的側面を、性指向や性自認、性暴力といった観点からではなく、それが産みに関わる身体であるという観点から問い直すということに、男性学的「産み」論を開始する一つの手掛かりがあるということ、またそれが、妊娠以降の女性の身体性に焦点を当ててきたフェミニスト現象学の「産み」論を踏まえた上で、「産み」の哲学的考察を更に展開していくべき一つの大きな方向である、ということだ。

実は、その点から言えば、女性の身体が「産み」に関わるということも、必ずしも自明のことではない[12)]。もちろん、女性の身体が生理的に妊娠出産の機構を有しており、多くの場合それが正常に機能するという意味では、女性の身体は産みに関わっている。しかし、その過程がその女性の意志とはほとんど関係なく、身体の自律的な働きとして自動的に進行していくという意味において、それが関わっているのは妊娠出産分娩という生理的過程であり、人間的営みとしての「産み」ではない、とも言いうるからである。つまり、単に身体機構の自律的働きと捉えるならば、妊娠・出産と、例えば消化・排泄の間には、どちらも主体的・意志的支配を逃れるものとして違いがない。両者を本質的に区別するのは、前者の方が非日常的で劇的な経過を辿るといった経験的な違いではなく――もちろんその身体経験が密接に関わっていることは間違いないし、それを軽視する意図はまったくないが――、その経験から新しい人間がこの世界に産まれ（う）る、という点にある。逆に言えば、この新しい人間という存在が妊娠や出産といった経験に含みこまれているからこそ、それらの経験がまさに産みの経験として立ち現れる。そして、その可能性は原理的に言って女性の妊娠・出産経験に限定されているわけではないのである。

もちろん、最終的には女性の身体は直接その新しい人間を分娩するのだから、その前後を通してその新しい存在を自らの身体経験に密接に繋げやすい。しかし男性の身体も、その過程に必ず何らかの形で関わっている以

---

12) 以下の論述は査読者のコメントに示唆を得たものであり、ここで謝意を表したい。関連して、居永（2014a）の後半部も参照。

上、自らの身体経験をその新しい人間の誕生という事態に接続して把握することは可能なはずである。繰り返しになるが、男性の身体を、パートナーの身体との関係性において、新しい人間を誕生させる身体、即ち「産む」身体として把握すること、それが男性学的「産み」論の一つの道であるように思われる。そして究極的には、この男性と産みの関係の探求は、単に男にとって産みとは何かという認識をもたらすだけではなく、フェミニストが蓄積してきた言説と相補的に産みの哲学を構成し、さらには「男であることの新しい道」を示すような、男にとっての解放の理論にもなるという、二重三重の成果をもたらすものになるはずである。

しかし、男性の身体を「産む」身体として把握すると言っても、それは具体的にどういう作業になるのだろうか。筆者にはさしあたり次の三つが思い浮かぶ。

間接的ではあるが、第一に必要だと思われるのが、これまで「産まない」身体として男の身体を構築してきた「男性的身体」論の批判的解体である。なぜなら、産みが死と並ぶ人間の条件であるとするならば、まず行うべきは、産む身体を理論的に構築するというよりも、そもそも産むはずの身体が産まないものとして構築されてきたプロセスを明らかにしてそれを相対化することだからである。もし「死なない身体」が観念的に構築されていたとすれば、それを解体することは、その基底にあるはずの「死ぬ身体」を浮かび上がらせることと表裏一体であろう。人間の条件として、死と産みが同じように自明であるかどうかは検討しなければならないものの、この点に関しては死と同じように、産まない身体を解体することは、産む身体を浮かび上がらせることと表裏一体だと思われるのである。

第二に考えられるのが、「産み」という概念自体の哲学的検討である。本論文では、繰り返し、産みを死と並び立つべき哲学的主題として挙げてきたが、それは単にその二つがそれぞれ重要だからというだけではなく、実は概念的にもこの両者は関連して把握されるべきではないのか、という筆者の哲学的直観による。先に、産みとは「その経験から新しい人間がこの世界に産まれ（う）る」ものだと述べた。居永（2014a）でも少し論じた点だが、この「新しい人」の一つの根本的な意味は、その人が「私の死

後に生きていく」という点にあるのではないか、と思われるのである。つまり、私が産むということは、私がいつか死ぬということを条件としているのではないか。また逆に、私が産む存在であるということから見えてくる死の把握というものがあるのではないか。このような哲学的考察を進めることで、第一の作業によって解体された「産まない身体」の向こうに、「産む身体＝死ぬ身体」が見えてくると思われるのである。

第三の作業は、文化人類学や社会学のフィールドワークに見られる男性と産みの関わりに関する知見の収集と考察である。思弁的性格の強い上の二つの作業に対して、歴史的に男性と産みがどのように関わってきたのか、また現在関わっているのかを突き合わせることが必要であろう。これは居永（2014b）で少し試みている。そこでは、四国の山村において伝統的に男女共同型のお産が行われていたという文化人類学のフィールドワークを参照した。その中では、夫が妻を抱えてお産させるという、単なる「立ち会い」を超えた、夫による濃密なお産への関わりが記述されている（現在はもう廃れているようだ）。例えばこのような知見を参照することで、一方で産むものとしての男のあり方のイメージを豊かにできると同時に、他方で、産みの哲学的考察によって精緻化された「産み」概念を通してこのような実践を見ることによって、私たちはそのような実践の持つ意味をよく理解することが可能になるだろう。

この三つの他にも、男性学的「産み」論を進めていく方向はいくつもあるだろう。ここに挙げたのは、あくまで現時点で筆者の頭に浮かんだものに過ぎない。本章の記述は、男性学的「産み」論のほんの導入に留まるしかないが、少なくとも、その可能性は示せたのではないだろうか。

おわりに

最後に、改めての注意と、今後の課題を述べておきたい。本論文では、産みの哲学的考察という着想を、フェミニスト現象学のレビューを踏まえて、男性学的「産み」論という問題設定へと具体化してきた。筆者には、この論述を通して、性と生殖と子育てを再接続したり、ヘテロセクシズム

を称揚したり、「子供を産み育てて一人前」という価値観を復興しようとするような、「保守的」な意図は全くない。そうではなく、筆者が目指しているのは、死と並ぶ人間の条件である（はずの）産みを、一人の男性哲学者が自らのポジショナリティを捨象することなく哲学的に探求すること、これである。そもそも何が先行研究なのかすら手探りで始めたこの作業の中で、筆者の励みになった森崎和江の次の言葉を引いておきたい。

> 私が子産みで経験したことの対極には、男性にとっての「産むこと」の対象化が必要であり、異質なそれを互いに知りあってはじめて、トータルな生きているいのちの継承を知ることができます。（森崎1989，170、強調引用者）

> ですから、どうか、産むことを両性共同のいのちの働きとして、各人の生命観の内側で考えることが可能な社会へと今を結びつけていけますように。（ibid., 174、強調引用者）

今後の課題は、何よりも本論文の最後に示した男性学的「産み」論に実質的内容を肉付けしていく作業である。さしあたり、主に英語圏で蓄積が進んでいる男性学（Masculinity Studies）関連の文献について、身体性をキーワードにしてレビューしていきたい。また、本論文で議論できなかった産みに関連する重要な主題として「性的差異」がある。本論文では「男女」の区別を素朴に用いたが、性的差異をめぐる議論はフェミニズムの中心にあると同時に産みという主題とも切り離すことができない。日本では加藤（1998）などが先駆的な作業を行っているので、その検討も含めて産みの視点から性的差異とは何かを問いたい。さらに、本論文では認識論的な関心からフェミニズムの中でもフェミニスト現象学に焦点を当てたが、例えば日本の第一波、第二波フェミニズムの中でも産みについて様々な文脈で論じられており、産みを考察する際の一つの参照軸としてそれらの言説を俯瞰する作業も必要だろう。残された課題は多いが、ひとまず、産みの哲学的把握という目標に僅かでも近付けたことを信じて、本論文を閉じ

ることにしたい。

参考文献

・日本語文献

青木やよひ（1994）「女性原理とエコロジー」『増補新版 フェミニズムとエコロジー』新評論、189-206.

有坂陽子（2004）「世界内存在と女性の身体をめぐって ――現象学とフェミニズム」長滝祥司編『現象学と二十一世紀の知』ナカニシヤ出版、162-187.

アーレント、ハンナ（1994）志水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫.

居永正宏（2012）「他者の産出と自己の誕生肯定」『現代生命哲学研究』第１号46-68.

――――（2014a）「「産み」の哲学に向けて(1) 先行研究レビューと基本的な論点の素描」『現代生命哲学研究』第３号88-108.

――――（2014b）「「産み」を哲学するとはどういうことか ――哲学と経験・「産み」の哲学に向けて(2)」『倫理学論究』関西大学倫理学研究会、巻号頁数未定（2015年初頭Web公開予定）.

稲原美苗（2014）「〈解題〉位置づけられた身体をもつことと家（ホーム）がもつ意味：フェミニスト現象学の視点から」『臨床哲学』15(2)、96-100.

上野千鶴子（2002）「「リプロダクティブ・ライツ／ヘルス」と日本のフェミニズム」『差異の政治学』岩波書店、180-207.

――――（2010）『女ぎらい 日本のミソジニー』紀伊國屋書店.

荻野美穂（2002）「男の性と生殖」『ジェンダー化される身体』勁草書房 222-249.

加藤秀一（1998）『性現象論 差異とセクシュアリティの社会学』勁草書房.

金井淑子（2008）「フェミニズムと身体論 ――リブからやおいへ」金井淑子編『身体とアイデンティティ・トラブル』明石書店、19-48.

齋藤瞳、宮原優、谷口純子（2012）「ワークショップ１ フェミニスト現象学における身体論の展望：現象学的身体論の拡張として（日本現象学会第33回研究発表大会報告）」『現象学年報』28、55-62.

シェル、リサ・フォークマーソン（2014）「位置づけられた身体をもつことと家（ホーム）がもつ意味」『臨床哲学』15(2)、74-95.

プラトン（2008）久保勉訳『饗宴』岩波文庫.

村瀬春樹＆村瀬幸浩（1994）『男のセクシュアリティを探る ――目覚めよ男たち！アツアツ・トーク』東研ブックレット.

森岡正博（2005）『感じない男』ちくま新書.

――――＆杉田俊介（2010）「草食系男子と性暴力」『フェミニズムはだれのもの？』フリーターズフリー .

森崎和江（1989）『大人の童話・死の話』弘文堂.

• 外国語文献

Adams, S. L. & Lundquist, C. R.（Eds.）.（2013）. *Coming to Life: Philosophies of Pregnancy, Childbirth, and Mothering*. Fordham University Press.

Baraitser, Lisa.（2009）. *Maternal Encounters: The ethics of interruption*. Routledge.

Bartky, Sandra. Lee.（1975）. "Toward a Phenomenology of Feminist Consciousness." *Social Theory and Practice*, 425-439. Reprinted in: 1990. *Feminity and Domination*. Psychology Press. 11-21.

————. (1990). *Feminity and Domination*. Psychology Press.

Beauvoir, Simone de.（[1949] 1976）. *Le Deuxième Sexe I & II*. Gallimard.（＝2001「第二の性」を原文で読み直す会訳『決定版 第二の性 Ⅰ事実と神話、Ⅱ体験（上）、（下）』新潮文庫）

Bigwood, Carol.（1991）. "Renaturalizing the Body（with the help of Merleau - Ponty）." *Hypatia*, 6(3), 54-73.

Butler, Judith.（1989）. "Sexual Ideology and Phenomenological Description: a feminist critique of Merleau-Ponty's Phenomenology of Perception." Allen, Jeffner. & Young, Iris.（Eds.）. *The thinking muse*. Indiana University Press. 85-100.

Fisher, Linda.（2000a）. "Introduction: Feminist Phenomenology". Fisher, L. & Embree, L.（Eds.）. *Feminist Phenomenology*. Kluwer Academic Publishers. 1-15.

————. (2000b). "Phenomenology and Feminism: Perspective on their Relation." Fisher, L. & Embree, L. (Eds.). *Feminist Phenomenology*. Kluwer Academic Publishers. 17-38.

————. & Embree, Lester.（Eds.）.（2000）. *Feminist Phenomenology*. Kluwer Academic Publishers.

Fischer, Sally.（2012）. "Becoming Bovine." Lintott, S. & Sander-Staudt, M.（Eds.）. *Philosophical Inquiries into Pregnancy, Childbirth, and Mothering*. Routledge. 191-214.

Guenther, Lisa.（2008）. "Being-from-others: Reading Heidegger after Cavarero." *Hypatia*, 23(1), 99-118.

————. (2013). "The Birth of Sexual Difference. A feminist response to Merleau-Ponty." Adams, S. L. & Lundquist, C. R. (Eds.). *Coming to Life*. Fordham University Press. 88-105.

Lundquist, Caroline.（2008）. "Being Torn: Toward a phenomenology of

unwanted pregnancy." *Hypatia*, 23(3), 136-155.

Lintott, S. & Sander-Staudt, M. (Eds.). (2012). *Philosophical Inquiries into Pregnancy, Childbirth, and Mothering*. Routledge.

O'Brien, Mary. (1978). "The Dialectics of Reproduction." *Women's Studies International Quarterly*, 1(3), 233-239.

Oksala, Johanna. (2003). "The Birth of Man." Zahavi, D., Heinämaa, S. & Ruin, H. (Eds.). *Metaphysics, Facticity, Interpretation*. Springer. 139-163.

————. (2004). "What is Feminist Phenomenology? Thinking birth philosophically." *Radical Philosophy*, 126, 16-22.

————. (2006). "A Phenomenology of Gender." *Continental Philosophy Review*, 39(3), 229-244.

Park, Shelley. M. (2006). "Adoptive Maternal Bodies: A queer paradigm for rethinking mothering?" *Hypatia*, 21(1), 201-226.

Rich, Adrienne. ([1976] 1995). *Of Woman Born*. W W Norton & Company. (＝1990 高橋茅香子訳『女から生まれる』晶文社)

Ruddick, Sara. ([1989] 1995). *Maternal Thinking*. Beacon Press.

————. (1997). "The Idea of Fathethood." Nelson, H. L. (Ed.). *Feminism and families*. Psychology Press. 205-220.

Schües, C. (1997). "The Birth of Difference." *Human Studies*, 20(2), 243-252.

————, Olkowski, D. & Fielding, H. (Eds.). (2011). *Time in Feminist Phenomenology*. Indiana University Press.

Stone, Alison. (2007). *An introduction to feminist philosophy*. Polity.

Welsh, Talia. (2013). "The Order of Life, How Phenomenologies of Pregnancy Revise and Reject Theories of the Subject." Adams, S. L. & Lundquist, C. R. (Eds.). *Coming to Life*. Fordham University Press. 283-299.

Young, Iris. M. (1984). "Pregnant Embodiment: Subjectivity and alienation." *Journal of Medicine and Philosophy*, 9(1), 45-62. Reprinted in: 2005. *On Female Body Experience: "Throwing like a girl" and other essays*. Oxford University Press, 46-61.

————. (2005). *On Female Body Experience: "Throwing like a girl" and other essays*. Oxford University Press.

Zeiler, K. & Käll, L. F. (Eds.). (2014). *Feminist Phenomenology and Medicine*. SUNY Press.

※本研究は JSPS 特別研究員奨励費 25-1743 の助成を受けたものである。